審査結果の要旨

氏名　　冨樫　順一

本研究は、生体肝移植ドナー35 症例を対象に、術後の健康関連尺度 QOL(Health-related QOL；HRQOL)を術前の時点と術後 18 ヶ月までとの比較で評価検討を試みたものであり、下記の結果を得ている。なお評価ツールとしては SF-36version2 質問票を用い、調査ポイントは術前および術後 3 ヶ月、6 ヶ月、12 カ月、18 ヶ月の 5 ポイントである。

1. 身体的健康度サマリーPCS に関する全体での QOL スコアの変化パターンは、術前での平均スコア 53.7 に対して術後 3 ケ月では統計学的有意差を持って 42.8 まで低下($p \leq 0.01$)したが、その後は徐々に回復を示した。術後 6 カ月の時点で PCS 平均スコアは 50.7 を示し、術前に比較して統計学的に有意差を認めなかった($p=0.36$)。一方、肝移植ドナーの術前での精神的健康度サマリーMCS 平均スコアは 54.5 であり、MCS スコアの変化パターンでは、術後 18 カ月の観察期間中一貫して落ち込まないことが示された。MCS スコアは術後 12 カ月で 54.8、術後 18 カ月では 55.2 と、術後 12 カ月以降、むしろ術前の平均スコアよりも高い値を示した。

2.　各項目に関して、身体機能 PF、日常役割機能(身体)RP、体の痛み BP そして全体的健康感 GH を含む身体的側面を示唆する要素では、術前スコアは日本国民の標準値 50±10(平均±標準偏差)よりも高いことが示された。身体的側面の平均スコアに関して、術後 3 カ月では身体機能 PF では 48.7 と低下し($p \leq 0.01$)、日常役割機能(身体)RP では 41.2 と低下した($p \leq 0.01$)。しかし術後 6 カ月以内には身体機能 PF では 53.1 まで($p=0.42$)、日常役割機能(身体)RP では 50.0 まで回復($p=0.66$)し、その後は、術前と同等であることが示された。一方、体の痛み BP のみは術後 18 ヶ月を経ても国民標準値には戻ったものの術前スコアまでには回復しないことが示された ($p \leq 0.01$)。

3.　身体的健康度サマリーPCS スコアに影響する背景要因を考慮すると、術後ドナー合併症の有無によって QOL スコアの変化パターンに有意差を認めることが示された(p=0.02)。合併症の有り無しによらず、QOL スコアは術前と比較して術後 3 ヶ月で合併症ありの群で 31.6 および合併症なしの群で 44.9 と減少し、その後術後 6 ヶ月で元に戻るが、その減少度合いが合併症ありの群のほうが強いことが確認された。またドナー年齢は 40 歳未満の若年ドナー群と 40 歳以上の壮年層ドナー群で検討すると、身体的側面において差を認めないものの QOL 変化パターンに差を示す傾向にあることが示された。その一方、精神的健康度サマリーMCS スコアには本研究においてどの時点の測定ポイントでも影響を与える背景要因は認めなかった。

以上、本論文は、生体肝移植手術における生体ドナーの手術が身体的活動に関し一時的な低下を認めるものの、術後回復の結果は総じて満足しうる良好な回復であり QOL の観点からは受け入れうる手技であることを明らかにした。生体ドナーの術後の満足度がどのように変化したのか、術後経時的に QOL を明確にするための評価を前向きに研究した報告は特に本邦においてなく、その臨床的意義は明らかとされていなかった。本研究では、追跡期間 18 ヶ月で 97%の高い回収率が確保され、左右肝グラフトの両方を含み、さらにレシピエント死亡症例のドナーからも調査対象とした点で他にはない重要な情報が得られている。生体ドナーに関するその身体的精神的回復状況を科学的に把握し、ドナーの幸福感を含めた QOL の状況を明らかにしたことで、患者への適切な情報提供に重要な貢献をなすと考えられ、その evidence を示した本論文は、学位の授与に値するものと考えられる。